

ごめんね、パピ

我が家の愛犬も、寂しく被災の日々にじっと耐えています。このところ、私たち夫婦が余りに多忙で、留守にすることが多いため、急きよ息子のアパートに預けることになりました。その後そこからまた、時折やむなくあちこちのお宅に、お世話して下さるいろんな方の所に、預けられているようです。私たちの手を完全に離れ、犬にはすまないとも、皆さんには有難いとも思っています。

ところで、我が家のその愛犬、13年前佐藤家にもらわれて来て今は年老いて、目は白内障で耳もすっかり遠くなってしまいました。晩年になってからのこの被災は、彼の目にどの様に映っているのでしょうか。震災この方、あちらこちら連れ回され、飼い主とは訳もわからぬ中、別れ別れとになり、それこそ大震災の大波小波に翻弄されてきました。

先日は、そんな我が家の犬が急に不憫に思われ、やっとのことでスケジュールの合間を縫って、夜遅く3、40分間、逢いに行きました。しかし、「来たよ」とドアを開けても何の反応もなく、しばらく抱く寄せた後も、すぐ息子の後追いをし始め、何だかよそよそしく遠巻きに元飼い主の私を(?)じっと見つめるのでした。彼も確かに、深く傷ついているようでした。初めて経験する微妙なその距離感は、何とも言えず物悲しく、彼が初めて見せたそんな態度は、まるで自分がどれ程辛いかを、切々と訴えているようでした。

「ごめんね、パピ(愛犬の名で犬種はパピヨン)。震災だから、ゆるして」と、謝ってみても、「そんな気休め、かえって戸惑う」と言わんばかりに、再び私を玄関で見送る視線は、「やっぱりまた、ボクのこと置いていくんだ。これ以上傷つきたくないから、心は開かない」と、物語っているようでした。

震災は、あらゆる絆を非情にも引き裂く、むごいものだと改めて思い知らされました。

「ごめんね、パピ。だけど、待ってて。パピは決して見捨てられたんじゃないから。震災が、こうしたんだ。だから、お父さんのことを、もうそんな目で見ないで。疑わないで。絶対迎えに来る。だから、その時まで、元気でいてね。今度逢ったときは、思い切り、急いで走り寄って、抱きついてきて。今までできなかった分まで、罪滅ぼしに、いっぱい撫でて、抱きしめてあげる。だから、甘えてね。震災が終わったら、またいっしょに住もう。その時まで、辛抱して。決して忘れていない、パピのお父さんより。愛しのパピへ」

こんな手紙、書いても無駄か。

11月10日 羽田～福岡便にて
佐藤彰